

—— チェルノブイリに思いをよせて ——

ポレーシエ



チェルノブイリ原発事故 20周年記念式典に参加

私たちは日本からやってまいりました。日本の「ヒロシマ・ナガサキ」の原爆被害から60年が過ぎ、今日、チェルノブイリ事故から20年を迎えました。世界中の人びとは、チェルノブイリの何らかの影響下で暮らしています。もちろん、直接的な被害を被ったウクライナ・ベラルーシ・ロシアの被災者の方たちほど大きなものではありませんが。しかしながら、原発事故は、人々の身体に深刻な病気をもたらしてい

るばかりではなく、深く、生物の命の根源にまで及んでいることを、チェルノブイリは世界に向かって警告し続けているのだと思います。 いったい私たちは、その警告に耳を傾けているのでしょうか？ 残念ながら、未だそうはされず、人類は世界のいたるところで、次の世代に負の遺産を残そうとしています。「ヒロシマ・ナガサキ」から始まった人類の未来への不安・核被害を、取り除こうとする私たちの力は足りてはいません。日本でも核施設での事故で犠牲者を出し、世界の国々では、核開発や戦地での劣化ウラン弾による被曝で住民が苦しめられています。 私たちは今日ここに、世界を救い、家族を守り、また故郷を愛した人びとを悼むために集っています。日本の詩人宮沢賢治は、彼の故郷の、病気や貧しさに苦しむ人びとを慰め、励まそうとしました。私達も賢治のように、今現在も苦しみの中にあるチェルノブイリの被災者たちの苦しみを、少しでも癒す手助けをするために、皆さんと手を携えていきたいと思います。それが、チェルノブイリをともに経験している私たちの、生きていく意味の一つだと思うからです。最後に、皆さんの健康と平和な生活をお祈りし、私たちの友情がこれからも続くことを願います。ありがとうございました。(戸村京子)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：市原佳代

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

**慈善基金「チェルノブイリの消防士たち」代表 ヴォリス・チュマク氏のスピーチ
親愛なる友人、同僚、ジトーミル市民そして客人の皆さん！（翻訳文より抜粋）**



この場に参列しているチェルノブイリ被災者たちは、世界を救った人々に敬意を表し、悲運に襲われた被災者と、親・息子・娘を失った家族を励まし、私たちと憂いを分かち合うための追悼の集会においていただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

すでに20年にわたって、地球規模の惨事であるチェルノブイリ原発事故は、私たちの心を苛み続けています。この黒い日付は、ウクライナ国民、そしてヨーロッパとアジアの歴史において、最大の悲劇の一つを表しています。今日に至るまで、私たちはあの宿命的な爆発の結果を完全に評価することができず、その意味付けすらできていません。私たちにわかっているのは、それが永遠に続くということだけです。チェルノブイリ事故によって被災したのは、ウクライナでは320万人であり、この悲劇がウクライナ人の運命に影響を与え、何百万人もの人々の生命の樹を揺り動かしました。

昨秋、ウィーンで開催された「チェルノブイリ・フォーラム」での報告によれば、惨事による被曝の影響で亡くなったケースは、50人にも満たないということになっています。

しかし、事後処理作業を行ったジトーミルの消防士289人のうち、45人はすでに亡くなり、67人は障害者になっています。彼らは当時22歳から24歳で、精力と希望にあふれており、幸福と愛に恵まれるにふさわしい若者たちでした。彼らは恐るべき敵である放射線との戦いに突入し、ウクライナと世界の生きとし生けるもののために闘い、そして勝利の高価な代償を支払って、40代で亡くなっていきました。

ウクライナの息子たち、娘たちがこの世を去っていきます。性別、年齢、地位を問うことなく、私たちは死神の鎌で刈り取られていきます。この過程に終わりはありません。チェルノブイリの問題は、極めて残念なことに、遺伝子の損傷によって孫や曾孫の代にも再発していきます。一人の人間の死は「大きな不幸」ですが、多数の死は「すでに統計」に過ぎません。その影響による死者の数、残された孤児の数、障害者の数を正確に知ることはできないのです。

私たちにとって、チェルノブイリはまだ終わっていません。20年の間にチェルノブイリの問題はもう片付いてしまった、などという幻想をでっち上げる必要はありません。この追悼の集会に参加していただいている日本の友人の方々に聞いてみれば、原子の災厄がどんなものであるか教えてくださるでしょう。とはいえ、チェルノブイリ原発から放出された放射性物質は、広島に投下された原爆の500倍なのです。

ですから、この不幸を決して忘れてはなりません。不幸は終わったわけではなく、身を隠してその邪悪な作用を及ぼし続けているだけです。今この場に、生き残った150人以上の、事故処理作業員である消防士たちが立っています。彼らの目は涙をたたえ、心は、彼らが運命の翻弄するまま放置されていることに、焼けるような痛みを感じています。

事故処理作業員たちの幸せを心から願い、彼らの問題を減らそうとできるだけのことをしてくれる人々がまだいなくなったわけではないことを、神に感謝したいと思います。チェルノブイリ被災者の名において、亡くなった人たちの家族や、障害者たちに応分の援助をしてくださっているすべての方々に感謝申し上げます。とりわけ、今日の集会に参加していただいている日本の友人たち、「チェルノブイリ救援・中部」のメンバーの皆さんに、お礼を申し上げたいと思います。彼らは15年にわたって、絶えず私たちに支援をし、被災者たちの余命を延ばしてくださっているのです。

親愛なる同国人の皆さん、また友人の皆さん！

皆さんがこの地上に存在し、太陽を仰ぐことを可能にしてくれた人たちのことを思い起こしてください。たとえそれが痛ましいものであっても、歴史なくしては、過去なくしては、未来もまたあり得ないのです。

（＊スピーチ原文はウクライナ語、翻訳：竹内高明）



〈前列左から、宮腰、池田、河田、神野(美)、滝川、森崎。
後列左から神野(英)、神谷、小牧(敬称略)：セントレア空港にて〉

「ナロジチ・ドリーム」

(名古屋市：池田光司)

チェルノブイリ原発事故のことについては、ニュース・講演・書籍などである程度理解したつもりでいました。しかし、頭での理解でした。百聞は一見に、いや一会にしかず、現地を訪ねてみて初めて心で理解できることがあるものだ、あらためて感じました。

原発から 60km、事故当時約 3 万人の人が住んでいたナロジチ地区。放射能汚染を避ける

め 2 万 5 千人の人が移り住みました。現在では、当時から住み続けている人が 5 千人、経済的な理由で他の地区から移り住んできた人が 5 千人となっています。そのナロジチ地区で一つの出会いがありました。ナロジチ地区の外れにある小さな教会との出会いです。

その教会は、今では、誰も訪れることがありません。道を挟んだ家々は主をなくして廃墟となっています。しかし、教会は朽ちることなく建っていたのです。しかも、会堂は隅々まできれいに掃除がされて、祭壇は刺繍された布や花で飾られていたのです。驚きでした。毎日礼拝が行われていると言われたら信じてしまうほどです。では、なぜ？ それは、2 km 離れた、まだ放射能汚染の危険の残るところに一人で住むおばあさんが、毎日通って教会を守っているからだそうです。二重の驚きでした。朽ちていくはずの教会が、普通に考えれば絶望的な状況にいるおばあさん一人によって守られているのです。おばあさんに会うことはできませんでしたが、おばあさんと触れ合えたような感じがしました。教会とおばあさんが、互いに日々生かし生かされている感じがしました。会堂の中に、静かに、でも途切れることなく湧き続ける泉のような希望を感じました。

今、チェルノブイリ救援・中部のスタッフのみなさんが中心となって、菜の花プロジェクトが立ち上がろうとしています。放射能で汚染された土壌に菜の花を植え、菜の花に土壌の放射能を吸収させて土壌を生き返らせようというプロジェクトです。しかも、このプロジェクトでは、放射能を吸収した菜の花から放射能に汚染されていない油やバイオガスを取り出して、畑作に必要なエネルギーとして使うなどエコサイクルも可能だということです。とても夢の感じられるプロジェクトです。立ちふさがる壁や思わぬ壁もあるとは思いますが、生き返った土壌で作物が実る日が来たらどんなにか素晴らしいことだろうと思います。一人ひとりの希望が、暴走することなく、教会とおばあさんのように一つ一つ静かに丁寧に紡がれていけば、きっとその夢の日が来る、そんな気がします。微力ながら、このプロジェクトに少しでも関わって、ナロジチの畑で採れた作物で作られた料理を食べながらみんなと乾杯できたなら…私の思い描いた「ナロジチ・ドリーム」です。

「自分は何を考えるか？」を問う旅 (名古屋市：滝川正子) * * * * *

ツアー参加理由は、「世界に誇るべく日本の平和憲法を守り、ヒロシマ・ナガサキそしてチェルノブイリ原発事故を風化させてはならない」という思いからです。ナロジチの汚染地区を歩き、石棺の前にして、「自分は何を考えるか？」を問う旅でした。あらためて持続可能な社会、原発に頼らない社会を目指すためには、「人間は愚かな生き物ではないことの証し」「命のつながりを大切にする」「暮らしの本当の豊かさを問い続ける」ことの大切さを、再確認させられました。4 月 28 日、石棺の前、や

や風下にいる私たち。同行者の持参した放射能測定器が、瞬間最大値 5.3 マイクロシーベルト（普段は 0.1 マイクロシーベルト）を示し、測定器のカウンターがピッピッと連続して鳴り止まない。私は、20 年経ち、亀裂からの雨漏りと崩壊が取りざたされる石棺を前にして、棺と実感しました。

発電をしなくなり、20 年経った今も、交代勤務といえども毎日数千人が被曝しながら働いている現場を、（私は）旅行者として数時間だけ訪問する罪悪感、居心地悪さを感じておりました。また、石棺から数百mのところ、コンクリート堀 1 枚隔てて存在する消防署には、当時は 75 人体制の消防士がいたが、今は 178 人もいると説明がありました。（ナロジチの消防士から、「私たちは実験動物と同じです」…と。）その消防署の建物の前にある、6 人の殉職消防士モニュメントのプレートには、ウクライナ語で「私たちは、この世界に生き続けたかった」とあり、残された家族の悲しみの深さはいかばかりか。

今回は、救援・中部の支援先であるナロジチ地区の土壌のセシウム吸収「菜の花プロジェクト」や、「水道施設再生支援」「医療機器支援」を実体験するスタディ・ツアーでした。

また、食と酒はどれも美味しかったが、量は驚異を越えて恐怖でした。しかし、通訳役の「チェルノブイリ救援・中部」キエフ駐在員竹内高明氏の美しい日本語は、耳のご馳走でしたよ。そして、季節はサクラ・トチの花咲き、カッコウ鳴き、コウノトリ舞い、壮大なドニエプロ川の流れ、雄大なステップに沈む夕日、朝露敷く森、豊かで美しいウクライナの旅に感動をし、感謝をします。

最後に、この社会は混乱と憎しみを重ね、日が暮れて、なお道遠しと思えますが、この旅にはキエフ在住の若い日本人留学生たち、父親からの誘いでアメリカから休暇を取って参加された若い看護師などと若者が多く、参加者の平均年齢は約 40 才かな!? 明るい未来が期待できそう！

もうしばらくは、私の 61 才の足も一緒に歩けそうです。

「私たちは実験動物と同じです。」（名古屋市：神谷俊尚） * * * * *

枯れた倒木の傍らに、新しい木々の緑、その奥に倒れかけた廃屋。30 km 手前の検問所を通過後、眼にした現実の風景。突然、巨大な集合住宅。かなりの人々が生活をしている（しかし、子どもがいない!）。同行の消防署員の話では、数千人の人たちが原発事故（4 号炉）・停止処理（1・2・3 号炉）のために、現在も働き続けているとのこと（今も新たな被曝者を出し続けている。）AM11:50 10 km 手前の検問所通過 これ以内の全ての集落は焼き払われたとの事。細い木々が寂しげに青葉を吹き出し、野生化した馬が、ゆったりと草を食んでいる。突然現われた巨大な建物群と冷却水用の人造湖。4 号炉、手前 300m ほどの広場で下車（放射線量測定 13.24 マイクロシーベルト・MAX 数値）。現場建物の大きさと石棺の弱々しさに眼を奪われる。展望所係員の説明によると、内部には燃料 200 t ほども残されており、センサーが配置され、温度・放射線量は測定されているが、全くコントロールできない危険な状態のままであり、その上、石棺そのものが弱体化しており、隙間から雨・雪が染み込み、外部からの補修工事も順次行なわれているが、崩落しそうな軟弱な構造物だ。その近くで新たな建設が始まっており、放射性廃棄物の保管施設になるとの事。この一帯は永久的に死の地域へとなくなっていくのか…。当時の原発労働者の町、プリピャチ市文化会館前に案内された。かなりの賑わい・近代的な都市や公園の面影が、突然消えたままの状態に残されている。巨大なマンション群が規律正しく立ち並び、今にも人々が家から出て来そうな部屋、部屋。何とも腹ただしい怒りで言葉も出ない。当日、参加者の総放射線量は 3 マイクロシーベルトでした。この度のスタディ・ツアーで出会った、ジトーミル市やナロジチ村の（明るくて、目の澄んだ）子ども達とウクライナの全ての人たちが、今後、今以上発病することなく健康な日々を過ごすことを願いつつ、帰国の途に就きました。現地、消防員・関係者の誠実さ、親切な案内対応に接して、これまでの「チェルノブイリ救援・中部」の活動・結果に、ただただ脱帽です。最後に、現地ナロジチ消防署長の「現在、ここで働いている私たち労働者全ては、実験動物と同じです。」その言葉が、今でも強烈に胸に焼き付いています。



〈後列左から神野（英）、竹内、宮腰、小牧、新井、ユウリン、西村、滝川、戸村、脇坂、池田（敬称略）：7747寺院を背景に〉

顔が見える交流・深まる友情

（江南市：森崎芳子）

このツアーで ウクライナの人や日本・台湾の留学生、駐在員の方などを知り、ウクライナがかなり私の近いものになりました。どこの国の人とも、その国の人の顔が見える交流・友情が深まることはとても大切で、その点でとてもいい旅になりました。このツアーをともにした素晴らしい方々にも巡り会え、感謝しています。

毎日の日程もほぼ計画通りに動き、よく練られ、

綿密に立てられたスケジュールだと思いました。幹事の方など大変だったと思いますし、よくやっていただき感謝しています。メンバーがそれぞれ別れてのホームステイは無理かな？（1～2日でも）私は、個人的なことで迷惑もかけたと思いますが、ウクライナの知人に会うことができ、家にも訪問させていただいたり交流できたことは（彼女は狭いアパートに母娘で住んでいました。）ウクライナの1市民を知り、より親しみを深め理解する上でもよかったと思います。以上のように 私の勉強不足もあつたりで、疑問も残して帰ってきた旅でしたので、昨日（5月13日）の河田先生の講演はぜひ聴かなければと思い出かけました。とてもわかりやすい有意義なお話で、疑問が解けた部分もたくさんありました。これからスタディ・ツアーはあると思いますが、さらに「生の声が聞けたり、見たり、ふれあうことができるもの」「行く者も何か役割ができたり、事前に話し合ったりして学習できるもの」になっていくことを希望します。また、反省・感想などメールで送るのですが、一方通行になりますので、サナトリウムでの反省会も1～2度あるとよかったと思います。以上 知識不足で見当違いのことも書いたかもしれません。その点はお許しください。

僕のカメラは撮りたがっている（滋賀県伊香郡：宮腰吉郎） * * * * *

このツアーに参加したのは、チェルノブイリやNPO 活動への関心というよりは、ビザなしで行けるようになったウクライナに行ってみたいと思っていたこと、そして時間の都合がついたというのが大きかったと思います。団体旅行は好きではないし、スタディ・ツアーという堅そうな響き、被曝への不安など躊躇させるものはありましたが、自由旅行ばかりしている自分にはこういうのも新鮮に感じないと考え、参加することにしました。さらに、以前からドキュメンタリー映画に関心があり、山形の映画祭などで最近のドキュメンタリー映画を見て、既に個人でも十分な質の作品を作ることができる時代に入っていることを感じていたので、特に構想があったわけではありませんが、「まずはこの機会に撮り始めてみよう」というわけで、出発直前にビデオを購入し、慣れないカメラに戸惑いながらも現地ではできるだけカメラを回し続けました。帰国後 12 時間半ほど撮影したのを見てみると、技術的な失敗や初歩的ミスがかなりあって、一人反省会状態になりましたが、ひとまずスタツア随記としてまとめるべく目下編集中です。今回の旅行で、否が応でもウクライナとチェルノブイリが身近になりました。旅行前はさして関心もなかったそれらの文字列は、もうスルーできません。今の時代は、次から次へと悲惨な出来事が報道され、いちいちそれに現実感を感じていたのでは身が持たないので、身体の自己防衛反応として現実感を持たないことにしているのだと思っています。こうして実際に現地の人々に会い、話を聞き、石棺間近で石棺からの風に吹かれ、退去勧告地域に足を踏み入れて感じたなにがしかは、その場でしか感じられない類のものだと思います。私は、30 過ぎまで海外に出たことはありませんでしたが、現地へ行って実感することの効用を過小評価していたところがあります。さて、「今後、チェル救は農業支援をしていく」という。「菜の花畑に空の青」という映像が目につく。僕のカメラは、どうやら撮りたがっているようだ。

<チェルノブイリ 20 周年メモリアル・スタディ・ツアー>

4 月 26 日のチェルノブイリ 20 周年セレモニーを中心としたスタディ・ツアーは、参加者それぞれの胸にさまざまな感慨を残し、無事終了しました。

*準備…今回のスタディ・ツアーでは、ツアーのスケジュール、日本ウクライナ市民交流デーでのイベント企画【1 グリブナ・バザール】の日本での準備、診療所などに贈る【一人ひとりの花】キルトの製作など、日本出発前にいろいろな準備がありました。2 月よりキエフ大学での留学が始まって、参加者募集などの仕事を後のメンバーに託して、ウクライナにやってきました。

*留学生として…キエフに来てからも、ジトーミルでの現地打ち合わせ、その他の準備のほか、キエフと日本間で、1 日に何度かのメールのやり取りで内容を詰めながら進行していききました。そしてキエフで、日本からのスタディ・ツアー参加者を迎え、他の留学生とともに現地参加するという、今までに経験しない立場での特別な感慨がありました。

*反省…4 回目のスタディ・ツアーとして、これまでの経験を生かした企画になったと思います。しかしながら、企画者の一人としてはいくつかの反省点もあります。スケジュールはほぼ滞りなく進んだのですが、その行程をこなすことに気を取られ、見学内容についての説明が充分でなかったこと、被災者はじめ現地の人々との生の交流があまりなかったこと、などです。

*若い感性…別の観点からみれば、参加者の中にはアメリカから来た人、ロンドンからの記者の同行参加、また台湾からの留学生の参加もあり、これまでになく広い世界からチェルノブイリに関心を持つ人が集まったことです。私を除く 4 人の留学生たちの若い感性が新鮮で、年長者と若者の交流も楽しかったようですし、留学生に参加を呼びかけた甲斐がありました。

<キエフの春は一気に訪れ、木々は初夏の装い>

キエフに来てから、毎日テレビの天気予報を見て、気温を記録しています。

3 月の気温は、23 日が 0 度、24 日はプラス 3 度、25 日 4 度、26 日 6 度（いずれも最高気温、最低気温はマイナス 3 度など）と、「まだ冬」でした。

それが 4 月の 20 日ごろから 16 度、17 度、18 度と上がり、23 日には 19 度となり、「遅い春」が駆け足で来たことがわかると思います。花が一斉に咲き出し、キエフの街じゅうのカシタン（パリではマジョニエ）が花盛りとなり、まるで白いうろうそくが木いっぱいには灯っているような感じがします。木々の葉は緑を増し、「もう初夏」の風情です。

ところが、このところ雨のばらつく日が多く、陽が差さないと肌寒いほどです。人々は皮の上着やコートを羽織ったりなど、思い通りの服装です。でも若い女性は、おしゃれ優先でおヘソの出る短いシャツで闊歩していますが。低気温のおかげで、咲き出したライラックの花は長持ちしています。

<オペラ・バレエシーズンも終わりに近づき…>

冬の長いウクライナでは、その間はオペラやバレエのシーズンです。日本とは比べ物にならないお値打ちの料金で見られるので、「今のうち！」と、勉強の合間に劇場に通いつめています。私たち（相棒は誰？）は、たいてい日本円で 500～750 円の席です。最初はチケットを買うのも冷や汗ものでしたが、今では欲しい席をロシア語で言えるようになり、これは勉強の成果といえるでしょう。先生が「劇場にしばしばと通う人のことを“チアトラール（女性はチアトラールカとも）”というのですよ」と教えてくれました。



チェルノブイリ 20 周年写真展 in 名古屋 は大盛況でした

写真展をするのは何のため？ 更に言えば、広河さんがここでシャッターをきられた理由は…？ と思うと、答えはひとつに収斂されていく。この子達、この老人たちの、この姿を一人でも多くの人に伝え、このことを世界の関心の枠外に放置しないためだと。

20 周年企画のひとつとして、汚染地ゴメリでもこの写真の一部 40 点を展示して、観ていただいた。「この写真はきれいすぎる。こんなにきれいなものではなかった！」と、吐き捨てる

ように言って通り過ぎた高齢の女性があった。この写真たちが「きれい」なのは、多分アート性の高さであり、それは単に広河さんの天賦の才能のせいにすぎない。この写真たちが私をひきつけるのは、その才能を超える「伝えたい」という思いへの連動なのだ、と改めて思う。

見馴れすぎたほど見慣れた写真の前でも、亡くなっていった子の姿の前では、胸にこみあげてくるものがあるし、生き延びて結婚した子の前では、何度でも安堵に浸る私がある。亡くなった子の写真の前に立つと、「あなたたちがくれるお金は、いつもきちんと使途が決められている。いくらかでも、私たちの判断で自由に使えるお金もほしい。なぜなら、死んだとき、お棺に入れる花のない子もあるし、死の床にいる子どもにおむつを買ってやる金のない親もいる。」と、現地救援団体の M さんがいつか言っていたのを思い出す。「この子のお棺には、花は入れられただろうか？ 息を引き取る直前、清潔なオムツがあったらどうか？」と自問する。「自らも生活苦の中にいる団体スタッフに、自由に使えるお金を預けてしまうことは、その団体に混乱を持ち込むもことになる」との見解から、M さんの訴えに応えてはいない。難しい課題である。これひとつとっても、チェルノブイリは、今日の問題として、私の目の前に厳然とある。予想を超える数の人々が来場してくださり、予想以上の真剣なまなざしで見入ってくださった。この写真展がもたらす今後への期待がふくらむ。

(広河隆一非核・平和写真展開催を支援する会 宮西いづみ)

4 者共催の一大事業となった写真展、なんとかやり終えることができましたね。マスコミもよく取り上げてくれたこともあって、想定外の賑わいに、嬉しいやらまごつくやら。実行委員として関わった方は、誰もが、戸惑いながらも心地よい疲労感を味わわれたのではないかと思います。僕の場合は、設営から開催前半の平日のみ関わらせていただいたのですが、「なんで、平日やのに人が次々来るわけ？」「やっぱり名古屋は都会だ」というのが、津市民の率直な印象でした。

今回は、100 点余を一挙に展示するということでしたので、ちょっと詰め込み過ぎかとも思われるレイアウトになっていましたが、多くの方が一枚一枚きちんと正面から見られていた様子に、「世の中にはちゃんと反応してくれる人がいるんだ」と再認識したような次第です。それに、この写真展を通して4つの市民団体が協力しあえたこと、この意味はこれからに向けて決して小さくはないと感じました。(DAYS JAPAN サポーターズクラブ名古屋 林 恒弘)



<写真展会場風景>

4月26日にあわせ、毎日のように報道で取り上げられたチェルノブイリ事故。その中で、多くの被災者が、今も続く放射能障害に悩まされていることを訴えていました。この写真展でも、破壊された4号炉は勿論、汚染された作物しかできない汚染された土地、白血病や甲状腺がんで望まぬ死を待つ子ども達、新たな命に不安を持つ母親、住む人を無くし朽ち果てた家、100年後でも帰ることができないプリピャチのアパート…。全ての写真から、奪われたものの重さと、伝えきれない絶望を、私達の心に訴えかけました。被災者にとって、戻ることのできない20年。これからも続く終わりの見えない現実、近い将来の私達ではないでしょうか？何の反省もなく、再び原子力発電に頼ろうとする今、彼らは何のために絶望の渦中にいるのでしょうか？

彼らは、新たな事故を望んではいません。20年は通過点です。明日、私達に起こるかもしれない20年後です。チェルノブイリの人々が犠牲となって教えてくれたことに、感謝したいと思いました。

会期中、来場者は1,000人に上りました。皆さん時間をかけ、109枚に向かい合い、丁寧に見ていただき、老若男女問わず感想を寄せてくださったことは、実行委員として充実の5日間でした。今回は、チェルノブイリ被災者の救援のみならず、中部地方で、環境にまたは平和問題にと活躍している方たちの協力で、成功させることができました。また一つ輪が広がりました。カンパは、チェルノブイリの子どものために使わせていただく予定です。御礼申し上げます。

(チェルノブイリ救援・中部 榎本恭子)

「チェル救デー」へのお誘い

今年のチェル救デーでは、スタディ・ツアー報告を行います。毎回、新しい試みで現地と交流してきたスタディ・ツアーも、今回で4回目となり、今まで以上に充実したツアーとなりました。初めてウクライナを訪問された方たちの、新鮮な報告をぜひお聞きください。

また、総会出席者には、2003年10月に行われたアレクシエーヴィチさんの講演をまとめた『チェルノブイリ 未来から示されたサイン』を差し上げます。お越しをお待ちしております。

日 時 ◆ 2006年6月10日(土) 午後1時30分～4時30分

場 所 ◆ あいちNPO交流プラザ B室

(地下鉄名城線「市役所」下車 徒歩2分 TEL 052-961-8100)

プログラム

第1部 ◆ 総会 2005年度の事業および決算報告

2006年度の事業計画および予算について

第2部 ◆ 第4回スタディ・ツアー報告

第3部 ◆ 茶話会

2006年4月26日、私達はウクライナにいた。生き残りの事故処理作業者らが行進する中、20年目の記念式典は大勢の市民が参列して行われた。亡くなった者たちのためにも、また今後も病気の苦しみと闘い、あるいは汚染地で暮らすしかない人々のためにも、事故の記憶を風化させてはならない。

● 20年目の春は巡り来ても・・・

森で木々が芽を吹き、白や黄色の一輪草の花で下草が絨毯のように美しい新緑のウクライナ。おそらく20年前の4月26日も同じであったろう。タンポポを摘む子ども達の上に放射能力が襲い掛かっていることも知らずに、母親達はおしゃべりをしていたに違いない。その頃、数10キロ先の原発では、燃え盛る炎と格闘する消防士や原発作業員らが次々と倒れて病院に運ばれていた。三日間だけの着替えを持ってバスに乗せられた住民らが、あの時永遠に故郷を失ったのだと知るのは、随分後になってからである。事故当日を想像すれば、こんなところだろう。

今回、20年目の春を迎えた汚染地ナロジチを訪問した。チェルノブイリ原発から南西約70Kmのこの町の若葉の美しい街路樹の通りは、相変わらず人影も疎らだ。全ての住民が移住すべきこの町には、今なお10,000人を超える人々が暮らしているというのに、畑で働く人々の姿もなく、町の寂しさは10年前も今も変わらない。産業が崩壊し、ソ連崩壊と経済破綻で移住政策が頓挫したのち、人々はここで生き続けることを余儀なくされた。それは失業による貧困と被曝による病気との戦いの始まりでもあった。ナロジチは、ウクライナでも最もガンや結核など感染症の多い町である。子ども達の7～8割は何らかの病気に罹っているという。この地域病院の医薬品の60%は、私たちの支援でまかなわれている。

● 始まったナロジチ支援

それでも人々はここで暮らし、子ども達は学校に通っている。今回訪問したボロトヌイツァ村の学校では、全校生徒38名が私達を迎えてくれた。

昨年訪れた代表団の働きかけで、この村の壊れた水道設備が復旧したばかりだ。道路脇の給水栓からほとばしる水は、冷たく美味しかった。3月に、中部よつば会の呼びかけで行われた「チェルノブイリ20周年救援バザー」の売上金は、別の村の水道復旧に使われる。安全な水の供給は、人に少なからぬ安心をもたらすに違いない。最近、ナロジチ地域病院に、私たちの数年来の願いだったレントゲン装置が導入された。今後、病気の早期発見や診断に威力を発揮するだろう。これは、私達の希望をかなえてくれた日本大使館の「草の根無償支援」による。今年中には、ナロジチ地区の21の村の診療所に、基本的な医療機器を整備する計画も進んでいる。こうして、ナロジチ地区で暮らす人々を支援する試みが、すでに始まっている。この支援を更に強化し、被曝と貧困との戦い、というより「困難な、しかし、より本質的な取り組み」に、私たちは踏み出そうとしている。

● ナロジチ・菜の花プロジェクト

汚染は一樣ではない。ナロジチ地区には37キロボツル/m² (kBq/m²) 以下の、いわゆる「非汚染地域」が2,300ヘクタールある。しかし、残りの約12万haは汚染地域である。「この中の比較的汚染の少ない場所でナタネを栽培し、セシウム137を吸収して土壌を浄化し、非汚染地域を拡大する」という新たな取り組みが、「ナロジチ菜の花プロジェクト（仮称）」である。ナタネ油は、安全なバイオディーゼル油(BDF)に転換して、農業機械の燃料に当てる。菜種による土壌浄化の研究は、近年数多く行われているが、実地に試された例はほとんどない。次回から、この計画について詳しく述べる。

(河田)

NPO法人チェルノブイリ救援・中部 2005年度収支報告書

(2005.04.01～2006.03.31)

収入の部	
項 目	金額(円)
救援寄付金	3,871,639
個人(479件) 3,027,774	
団体(17件) 843,865	
運営費関連寄付金	536,000
個人(66件) 498,000	
団体(5件) 38,000	
外務省補助金	0
地方公共団体交付金	0
民間助成金	4,000,000
物品売上等	617,680
預金利子等	254
現金過不足	0
当期収入合計	9,025,573
前期繰越	11,750,293
収入総額	20,775,866

支出の部	
項 目	金額(円)
事業費	9,450,779
医療機関支援事業費	2,600,000
医療機器提供事業 1,600,000	
医薬品提供事業 1,000,000	
保健事業費	1,200,000
粉ミルク提供事業 1,200,000	
被災者団体等支援事業	1,200,000
外務省返還金	3,500
評価事業	227,558
奨学金事業費	1,575,990
派遣費	632,098
業務委託費	449,989
駐在員費	250,000
輸送費	157,028
文通・クリスマスカード事業費	51,716
特別事業費	140,000
機関紙発行費用	942,460
国内監査費	7,000
イベント参加費	10,000
キャンペーン	3,440
管理費	2,774,674
人件費	1,239,400
通信・荷送費	148,572
印刷製本費	215,575
旅費交通費	318,410
会議費	13,550
消耗什器備品費	33,948
消耗品費	96,692
修繕費	37,190
事務所費	562,103
支払手数料	64,140
為替差損・両替手数料	1,094
諸謝金	8,000
団体会費	36,000
雑費	0
使途不明金	0
当期支出合計	12,225,453
当期収支差額	▲ 3,199,880
次期繰越収支差額	8,550,413
支出総額	20,775,866

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正當に処理されていることを証明します。

2006年 5月 1日

監査人

南 和也 (南)

事務局便!

チェルノブイリ20年目のスタディ・ツアーで盛り上がっている頃、楽園アパートの事務所で、事務局員約一名は思いっきり盛り下がっていた。今年度の仕上げとして、監査を経て来るべき理事会・総会に向けての準備をしなければならず、それは、私の最も苦手とする「数字」の「スタディ」であった。チェル救は、優秀な会計・綾部さんを得たものの、就任わずかな彼女にこの仕事を全てお願いするわけにもいかず、最不適任者がまさに格闘していた。blood type Aの悲しさ、寝てもさめても数字が頭の中を舞い、夜中「はっ」と目が覚め、訂正箇所気付く。その繰り返しの拳句、肝心の資料ができていないことに気がつき、頭はまっしろ!さすがに泣きが入ったが、あとは火事場のくそ力にまかせ…。新しい会計システムを導入しながら、それが、充分活かされていなかった事によることも大きく、なんとか早くそれを活かしたいものだ。

チェルノブイリから20年、今後は「風化」との戦いを余儀なくされるだろう。しかし、チェル救はあきらめない。「減少するチェル救資金を凝視しながらも、被災地・被災者の『希望』に連なる『隠しだま』!」を模索する。盛り下がってばかりはいられないのだ。「菜の花畑に、入日うすれ、見渡す山の端〜!」
—06年度始動。ナロジチ菜の花プロジェクトへ向けて。(山盛)

今年3月に5日間の研修期間を経て、4月から正式に「チェルノブイリ救援・中部」の会計担当として活動に参加させて頂く事になりました綾部です。

私はこれまで28年間の銀行勤務から、その後会社の経理の仕事をして参りました。ご縁をいただき、またこのような社会参加に関われることに、緊張感と責任の重さを感じています。

チェルノブイリの事故から20年という時を経て、当初は深い関心をもっていた自分自身も、時の流れとともに関心が薄くなっていたことは否めません。2ヶ月間、活動に参加させて頂いて、あらためてこの事故を風化させてはいけないという思いを強く感じています。そうした被災者の方々のために、支援者の皆様の熱い・尊いお気持ち、被災者の人達の心の支えになってくれることを願っています。温かい支援者の皆様を始め、事務局関係のスタッフの方々にご指導を仰ぎながら、精一杯頑張っていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。(綾部敏子)



編集後記

☆最近のちょっと嬉しい出来事は、5月中、WOWOWを無料で見られること。この間に2年分くらいのレンタルビデオ代をうかせようと、映画を録画しまくり。あ〜あ、いいことってこんなことか〜(佳)

☆「事故後20年」の今年、テレビや新聞で頻繁に報道されていた。この関連記事の切り抜きを取っておこうと決めたおかげで、隅々まで読む習慣が身についた。毎年4月26日は訪れる。矢のごとく去り行く日々のなかにあっても、地球人として忘れてはいけない。(美)

☆ウクライナでは、今なお15基の原発が稼働している。「なぜ、こんなにひどい仕打ちを受けたのに、危険な原発に頼り続けるのか?」…私達の問いかけに、「日本こそ、狭い国土に50基以上もの原発を作り続けている。安全だと思いついでいるのは、あなた達の方ではないのか? まず、自分の国を見つめ直してみたらどうだ。」「…(絶句)。」 私達日本人は、まだ、チェルノブイリが鳴らす警鐘(本当の教訓)を理解していない。(J)

〒456-0003 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX (052) 871-9473